
49番目

蒼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

49番目

【Zコード】

N3126Z

【作者名】

蒼

【あらすじ】

聖戦という悲しみの世界で造られてきた主人公の鈴蘭は、仲間と好きな人と兄に出会い、自分がこの世に造られてきた意味を知つていく。兄妹の絆と恋愛と仲間の大切さと少しだけギャグありのお話です。

プロローグ（前書き）

基本原作沿いになるかと思います。あ でもオリジナルストーリー
がちょこちょこ入るので少しだけ原作壊します・・・。

プロローグ

仮想19世紀末・・・
世界の終焉を田論む「千年伯爵」とイノセンスに適合したエクソ
シスト達の戦いの中で。
私は 造うまれてきた。

最初は ただ何のために造うまれてきたのかなんてわからなかつた
けど・・・

今ならわかる。

私は、きっとみんなと 彼と お兄ちゃんに出合つたために造うまれ
てきたのだと。

もしそうだとしたら・・・

私は もう少し・・・この悲しみの世界で生きていくかもしれ
ないね。

「おーい 鈴蘭ーっ」

彼が 私の名前を呼ぶ声がした。

『なあに? ラビ

だから私も彼の名前を呼んだ。

プロローグ（後書き）

プロローグ 意味わかんねえよって思われた方 すいません・・・。
きっと 話が進むとわかってきますのでお楽しみにっ
鈴蘭 主人公が恋するのは、ラビの予定です。たぶんこれは変更さ
れないと思います。

第1夜 主人公紹介（前書き）

このお話の主人公の紹介をしたいと思います

第1夜 主人公紹介

鈴蘭

黒の教団エクソシスト。15歳の女の子。アスパラガスが食べれない。

イノセンスは鎖。

5歳の時に親に捨てられクロス元帥に拾われ今まで育ててもらっていたらしい。

そのため、クロス元帥の事を父親のように思っているが、師匠としてのクロス元帥は存在 자체が理解出来ないくらいに嫌っている。

アレンよりも前にクロスに弟子入りしている。

どうやらノアに身内がいるとかいないとか・・・

千年伯爵は鈴蘭が欲しいらしい。理由は鈴蘭の過去にあるとか。

銀蘭

15歳の少年。鈴蘭とよく顔が似ているが何者かよくわかつていらない。

鈴蘭はどうやら彼の事を知っているみたい。

自由奔放で単独行動が多く未成年なのに酒を飲み、タバコを吸い目上の人にも態度を改めず周りに迷惑をかける所は

どこかの赤毛で長髪、酒好きの女好き元帥にどことなく似ている。

い。

クロス元帥とはかなり仲は悪いものの昔からの知り合いらしい。

そして千年伯爵ともお知り合いの様子。

性格は基本クロス元帥にそつくりだが、自分を犠牲にしてまで一人の人を守りうとしている。

第1夜 主人公紹介（後書き）

主人公はこんな感じです。みんなに気に入つてもらえると嬉しいです。

鈴蘭の嫌いな食べ物をアスパラガスにしたのは発音的に鈴蘭が嫌いそうだったからです。なので得に意味ないです。

みなさん 銀蘭の事嫌いにならないであげて下さい・・・。未成年でお酒飲んだりしてて性格悪そうだけど、本当は良い奴なんですっ！（まだ 話進んでないから彼の事詳しく書けないのが悔しい・・・。）

お話進んだら 良い奴だつてわかりますよ。

第2夜 旅立ち（前書き）

鈴蘭 クロス ラビ この3人の視点で書かれてます。少しキャラ崩壊アリ・・・かも？
それでもいい方 読んでください

第2夜 旅立ち

小さな村にある駅で 淡い甘栗色をした長い髪の少女と癖のある赤毛を無造作に伸ばした男性が列車を待っていた。

「鈴蘭。」

赤毛の男性に呼ばれ 振り返るこの少女こそ このお話の主人公である。

『なんですか？師匠。』

そして 鈴蘭に師匠と呼ばれたこの男性の名は “クロス・マリアン”

女好きで無類の酒好きな性格で そして鬼。鈴蘭はこの人の鬼のような性格にとことん困らされた。

「もうすぐ 列車がくる。」

遠くのほうから汽笛が鳴つてるので 目的の列車が近づいていくことは鈴蘭もわかつていた。

『・・・それが どうかしたんですか？』

幼い頃に 捨てられていたところを拾われてから私は彼にずっと育てられてきた。

・・・長い付き合いなのだ。

ここまで育ててきてもらった父親のような存在の彼と。

そして 鬼のような性格でイノセンスの扱い方についてかなり厳しく教えてくれた師匠の彼と。

だから なんとなく嫌な予感がした。

「お前は今ここで 僕達が列車を待ってる理由・・・わかってるよな？」

師匠としての彼が 不敵な笑みで私を見る。

『正式にエクソシストと名乗るために 師匠と一緒に本部に挨拶に

行く・・・んですね?』

つい最近 やつと自分のイノセンスというアクマを倒す力を扱えるようになり。

師匠にエクソシストと名乗つていいと言われ 今に到つてゐるわけなのだが。

どうしよう 絶対に今から何かが起つて!

なんか 私の身に現実じゃ起つちゃいけないようなコトが起きちゃう気がすごいするよ!?

「よくわかつてゐじやねえか。・・・お前 本部の場所は知つてゐよな?」

私は 身の安全を確保するため師匠から一歩後ろへ下がり距離をとつた。

『・・・なんとなく なら知つてますけど・・・』

すると 師匠は懐から物騒なものを取り出した。

・・・なんでだらう・・・?これから先 自分の身に起つることが最悪なことな気がしてならないよ?

杞憂であつてほしいなあ。いや、そうであつてくれ。

「お前のなんとなくはアテにならん。・・・鈴蘭が今持つてるカバンに本部の地図とプレゼントを入れといた。コムイという幹部にも紹介状を送りつけといたから・・・」

師匠が物騒なものを振り上げて歩み寄つてくる。

どうやら 杞憂ではないみたいだ。

「一人で 本部まで行け。」

『え ちょっと待つてつ! 一緒に行つてくれるんじゃないんですか! ? つか バックれるつもりでいるでしょう師匠! !』

「俺がお前と一緒に本部に行くとでも思ったか?」

・・・あ 一緒に行つてくれないんだ。だから師匠旅行カバン持つてなかつたんだね。なんでカバン持つてないのか今 その理由がわかつたよ。

『なんで一緒に行つてくれないんですか! ? なにかよっぽどの理由

とかあるんですかっ！？』

師匠が一瞬 物騒なものを振り下ろす手を止めた。

・・・そのまま時間よ止まつてくれ。時をかける 女並の電車の踏み切りにチャリで突つ込むくらいのチャレンジなら私出来るから！つかやらせて下さいっ！！そんな無謀なことして時間が止まる・・・戻れるなら万々歳じやあございませんかっ！！

「よつぽどの理由・・・？」

師匠の目が光る。物騒なものが再び私に向かつて振り下ろされる。列車が近づいてくる。・・・あの列車 ヘタしたら天国行きになつちやうじやん。

「俺 本部 あそこ キライなんだよ」

ぶおつ と物騒なものが勢いを増し ゴツと鈍い音をたて私に当たる。

そこで 私の意識は途切れた。

列車がホームに止まり ドアが開く。

俺は、地面に倒れている鈴蘭を担いだ。

「・・・悪かつたな。こんなことして。」

弟子としてではなく、今まで育ててきた娘のような存在の鈴蘭に俺らしくはないと思いながらも謝罪の言葉を言つ。

まあ・・・こいつの意識は 俺が先ほど殴った衝撃でないだろうが。

「これでも、アレンの時より軽く殴つたんだからな。」

そう言いながら列車の中にカバンと共に放り込む。

それと同時に列車のドアは閉じ ガタン、ゴトン・・・と進んで行く。

俺は 鈴蘭が乗つた列車が見えなくなるとホームを後にした。

「そろそろ起きあんか “ラビ”」

今回の任務の同行者であり、自分の師匠でもあるブックマンに呴き起された俺の名は “ラビ”

『んー・・・・もつけっと寝さして・・・』

そういつと、思いっきり蹴られた。

痛えなこのパンダジジイ ・・・ 口に出すと座敷が増えるのでも言わないが。

「もうすぐ教団に着く。・・・ 眠気が覚めんのなら 列車内でも歩いて来い。」

確かに今の俺は眠気が覚めず、このままでいるとまた寝そうだった。

『んじやー ちよつと歩いてくる。』

まだ朦朧とする頭で俺は用意されていた個室を出て行つた。

まさか この列車でいつに会うなんて思つてもなかつた。
ここから 運命の歯車は回り始めたんだと俺は思つ。

第2夜 旅立ち（後書き）

・・・長かった。ホントに長かった。こんなに長いの初めて書いたよ。

ここまで長いの最後まで読んで下さりありがとうございました！
ギャグに近いの書くと鈴蘭のキャラが崩壊することが判明。
本当はもうちょっと女の子らしい性格します。本当ですね。

今回 時をかける 女のネタ書いて思つたんですけど 時をかける女つて

時間をとめるのか 戻すのかわからなくなつたんですよ（なら使つなよ。って感じなんですが使いたかった）。

私は 時をかける 女の内容 おおまかにしか覚えてないので・・・。
母親に聞いた所 時間を戻すだつたはず という返答が来たのですが
「だつたはず って曖昧な。」と思い信じるに信じれず。
実際 どつちだつたか覚えている方、よかつたら感想の所に書いて
教えて下さい

第3夜 出会い（前書き）

なんか シリアスっぽくなっちゃったかな？って書き終えて思つち
やつたり。

個人的にそう思つただけなので 気にせず読んで下さい

・・・この話書いてたとき 雪降つてたんですね。軽く積もつて
ました。

俺は列車の中を歩いていた。

そして 列車の入り口近くで・・・

ふ
み
よ

• • ?

何がを踏んだ。

俺は何かがあるであれ、足元を見た。

どうやら俺が踏んだモノは白いワンピースを着た淡い甘栗色の髪の少女だつたらしい。

•
•
•
○

しだりの間、思考が止まりてしまふ。

うん
だよ。少女が列車の入り口で倒れてるんよ？

『文政元年』

俺は女の子を起こす。

『ダイジョブさ？どっか怪我とかしたさ？』

怪我? はないので・・・安心して下をこごめん。

女の方に怪我がないことかわからず、安心していたらな

「・・・あの、そのコートの胸にある紋章・・・ローズクロスです

よね？」

『 そ う だ け ど ・ ・ ・ こ れ が ど う か し た わ ？ 』

いつもなら 疑うハズなのに。

AKUMAかもしれないと警戒しなきやいけないのに。

なぜか、この女子には疑ひの心をしなかつた。警戒する心よりも

なかつた。

・・・なぜ？

任務終わりで気が抜けてたのか？

もうすぐホームに帰ると どこかで油断していたのか？

・・・違う そんなことじやない。

じやあ どのような理由でこの女の子を疑わなかつた？警戒しなかつた？

・・・そんなこと 女の子（鈴蘭）と出会いたばかりの頃の俺に問い合わせたつて答えるなんて出やしない。
これは 後々にわかることだから。

でも 今わかることは・・・

『・・・（初めて会つた気がしないことと ビニが共通点があるような気がする）

初めて会つた気がしないことと ビニが共通点があるような気がするこの2つだけ。

「あー・・・?おー・・・?」

ビニやアラビア語で何と答えていたらしく 話しかけても返事をしない俺に對して不思議に思つたのだろう。声をかけてくる。

『じめんさ ちょっとと考え事してた。・・・んで?』のローズクロスがどうしたんや?』

「あの だからアナタはエクソシストさんですか?つて・・・さつきから聞いてたんだけど・・・違いましたか・・・?」

『いんや。違わないわあ。・・・俺は黒の教団のエクソシスト。・・・キミは?』

俺が尋ねると 女の子は立ち上がり頭をペコリと軽く下げた。

「鈴蘭と言つます。黒の教団に用があつて來たの。」

黒の教団に用があるつて珍しいこともあるものだ ・・・なんて考えながら俺も自分の名を言つ。

『俺の名前はラビ。・・・よろしくね。』

自然と鈴蘭と目が合つて 笑いあつ。

これが俺と鈴蘭の出会いだった。

出会い系としてはちょっとアレだつたけど、でもまあ・・・

今思えば俺等らしきつらやあらじい出会い系の方だったよな。

第3夜 出会い（後書き）

今回は ラジ視点にしてみました。どうだつたでしょうか?
前回よりは短くなるようにがんばりました・・・。
次回はたぶん ぱんだ・・・失礼。ブックマンが出てくる・・・か
な?

（早く 銀蘭を登場させたくてたまらない蒼です。短編書こうにも
銀蘭の正体がわかつちゃうので書けず・・・）

『くそあ 銀蘭のばかやろう!-』

「・・・俺にハツ当たりされても困るつづーの・・・」

なんか 出番ないとかわいそうなので後書きと前書きでこれから銀
蘭くんと会話したいと思います。

『だつて 彼 一応このお話の主人公だし。主人公が出番ないとち
よつと哀れじゃないか。』

「・・・哀れと思つてんなら早く話進めたらいいだろ・・・。」

・・・まあ 次回もお楽しみにしててくださいつ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3126z/>

49番目

2011年12月16日19時07分発行